海名産圖會 二

Ξ 5
2219
2

昭本山海名産圖會巻之二

○目録

○豊島石　○御影石
○龍山石　○砥礪
○芝　○日向香蕈
○熊野石耳
○同　蜂蜜　蜜蠟　會津蠟

ヨ達ま5
2219
5-2

○山椒魚　○吉野葛
○山蛤　○鷹峯蕈虫
○鷹羅　○鳧羅
○豫劦峯越鳧　摂劦霞鳧羅　無雙返
○捕熊　陸弩　取膽　洞中熊　以斧擊　試眞偽　製偽膽

石品

石ハ山骨なり物理論云土精石となり石ハ氣の核なり氣の石を生ずるハ人の筋絡爪牙のごとくなれども其石質よれるてハ萬國萬山の物悉く等からず是風土の変更なれば昂氣とをたがい生ずるなり

うゐ草木魚介皆〻化して石となるもの本草ハ松化石宋書ハ柏化石稗史ハ竹化石ハ代醉編ハ陽泉夫餘山の北ハ清流數十歩草木浅酒〻皆化して石となる又イタリヤの内乃一國ハ一異泉ありて何の物とハなく其中ハ墜るべ半月ばかりして便ち石皮を生じ其物を裹又歐羅巴の西國ハ一湖有て木浅内ハ挿さんで土ハ今一段化して鉄となるなり中ハ一段化して石となるといへり本朝ハ海濱多く凡寒國の海濱湖涯いづれも石となるもの番物等の化石と其所ハなると知るべし又石ハ鞭うちて雨を降しまたハ雨を降しまむる陰陽石ありて日本にも寶

亀七年仁和元年及東鑑等に其例見えたり江州石山は本草に
いる陽起石にて天下の奇巖なり又日本記雄畧の皇女伊勢齋宮
よりせられひしに邪陰の法にて皇女の腹中に開き給ひて
物いりて水のごとく水出て石にうつるを是醫書に云石淫なるべし然な
物の淫なるを理において一なり品類においては鐘乳石 慈石 礬石 滑石
礬石 消石 方解石 寒水石 浮石 其餘の奇石怪石動物なども暴に
近江の人の輯作せる雲根志に盡ぬべし悉く辨ずるに及ざる
○イシとは和訓ハシとはもと本語にてシムイシカリなどのごとく物の凝り
定まりたるの義なり○イハとは石齒なり盤の字と書くはもと石にて
齒牙のごとく健利の意なり○イハホとは巖の字なり元にて詩經維石巖々と
いひしごとく尖利なる義なり萬葉には石穂とかきて秀出る形
なり又いとは石もとりかそぐ薄て物を穿ぬいてもいとはずして通
よりて○日本にて器用に造る物をもく然かるを然れども五畿内西國に産る

うちに御景石 立山石 豊島石等は材用に施し人用に資して就
物に比べ故に其三四箇條を下に擧て其余を畧す和泉石は色必
青く石理精にして牌文等を刻て又阿州に近年出るもの是に類
す其石泝ぶ川に似て色綠に石形斤そのごとく石質は硬からず又城州
にて鞍馬石 加茂川石 清閑寺石等是と庭中の飛石に置く
水を保ち世濁を洗賞し九に貴人茶茶の翫物に為す

○豊島石

大坂より五十里讃州小豆島の邊に廻環三里乃島山なり家浦かり
と村とに村の三村にして家の浦に家數三百軒斗有り村に百十八
十軒ばかり中にもかろくとして出る物多く硬くして鳥井土居の類是と
以て造製をなすに山の他山とかわりて山の表にて打切堀取るに
唯山に穴して金山の坑場に似たり洞口を開きて奥深く堀穴を敷ねと縱横

讃州豊島石

同島細所

豊五

切稜さ十町廿町の道をなし採工松明炬照しぬまぶ穴中真黑うして石た
土ともろもろかたく採工も常の人色とは異なりかく堀入るを如何ようれば
えぬ式石ゝは皮あるて至て硬し是今移ぶ川と号て出し物ゝて（ハ伊豫と）矢と
金を破取るとせどもそぐ幾重ゝも片ざるのゝなり流布の豊島石ゝ其
石の實なり故ゝ皮弦除て堀入る事ゝ中ゝも家の浦ゝ敷穴七ツ有
されども山を越えて隔ふ所なれば器物の大抵を山中に製ゝて搬出せり
水筒水走火爐一ツ竈などの類ゝて指別大なる物はなゝから村は漁村なれ
ども石もかろゝとの南より堀出し石ゝは山下に群居ゝ但ゝ讃岐の山悉く
ゝ式石のゝゝて弥谷善通寺大師の山石窟も式石ゝて造るとゝ

○石理は　石落のあるとすると凝ゝそるゝとゝ深石ゝ似て石理麁なり故水盥
などゝ製ゝて水漏ゝて保ゝたなゝ
都宮ゝ出せるゝの式石ゝ似てゝ
物ゝて伊豫薩摩紀州相模ゝ産ゝ式山も海中の島山なれば開

闢以後汐の凝ゝそる物ゝもゝかそれ佐る塩飽の石ゝ式ゝ塩泡の薄ゝ
そるゝゝ○塩飽石御国山ゝなゝて今まと号る物ゝ多ゝ見附と賞ゝ
是其邊の礒石ゝて石理粹米ゝ式ゝ質ゝ硬ゝ能石水硯抜石等ゝ
用て早く苔ゝるを詮ゝ礒石波ゝ穿られて碾研異形ゝ珍重ゝ

○御影石

摂州武庫莵原の二郡の山谷ゝ出せる山下の海濱御影村ゝ石ゝ切ゝて。
是坑器物ゝも製ゝて積出ゝ故ゝ御影石ゝは山ゝ御影の石ゝ城加加義
あふひを採る山ゝて式國ゝ山石ゝ切ゝるゝ村中ゝ御影の松有ゝ
讀古今集ゝ基俊卿の古詠ゝ式山ゝ海濱ゝて往昔ゝ牛車ゝ貢ゝ
ゝるゝゝゝなゝて今ゝ海渚次第ゝ侵埋て山ゝ遠ざるゝ石も山品の物ゝ
取盡ぬれども今ゝ奥深く採ゝて廿丁も上の住ゝ村ゝ牛車ゝ以て絶て
御影村ゝ出せる有馬街道生瀬川原ゝ式奥山ゝ産ゝ式上品の

御影石
構

石こいかを至て色白く黒文なし是は背より生て今は鮮なりされども其費用をぞ厭はずして高嶽深谷より入ては得ざることにつゝぶとゝも運送車力の便なき所のゝ多し

○石質　文理い京白川石より価て至て硬し故より器物より制するに微細に接尖も手練より應ぞ白川は酒落して工より任せず石工大なる物より至ては難波天王寺の鳥井なとゝ城廓石槨佛像墓牌築垣より造て啄磨ていの皮膚のごし是萬代不易の器材天下の至寶なり

○品數　直塊火鉢・中鉢・小鉢・沐浴・氷鉢は用るこゝろ本誤くはを柱礎溝石なとゝ各その用多し頭無は大さ大抵一尺五六寸にして其上の物を一つ石と号くこゝ六人といふこゝ一荷より六い宛擔の名なり栗石は小石にして大雨の時は山谷より轉び落ふ物也石より稜なし是は鉢前蒔石等に用ひ石をころとゝいふこと應神記の号より萬葉集に興ほいろゝもこゝて山澤道の俗言なりともいふ大小よかゝるべつふこそ

割石は大割　中割　小割　延條長切なり　蓋石大抵長二尺半幅一尺二寸厚三寸いとれも築垣

橋墓　石橋　庭砌　土居なと其用多又石橋より架る物別の河物なり出て石も有なり○切取は矢穴鐵堀て矢と入をなけ石鐵をたゝひ石の人るとて手鉾と以く離取とす附割とゝ又横天穿穴割とゝ小割といふこゝ

○龍山石

播磨より産して一山一塊の石なり故より樹木なくれ往く此石山多くれども運送の便ゝき所を切出て今は堀採やうになれども運送不便の山ゝさゝらに存して切入る事なし石の實殿は即立山石にて其邊を便所にて專切出採法とゝかゝることなし故より図も累せて色は五彩を混交切て形を成さて事皆方條よのゝ小ゝ溝渠河水の涯岸或界壁の敷石敷居の土居庭砌等の用より抵て他の器物より製らることなし大さは三四尺より七八尺も及び方五寸より六寸すの物迄五六寸といひ五寸より七寸と五七といひて尚大なる品數あり

麓の注市村より石ゝ南の尾嵩より龍ヶ端とひく

山
砥
石

○砥礪

精なるものを砥とし粗なるものを礪とす

諸国の砥は王城五里を離れざる帝都に隨ひて産する所なれども空しくなりぬ
かゝる肯和加春日山の奥うち出せる白色の物は刀劍の磨石なるとゝ雖
堀りとなく其跡のこる殘れり今こゝ城加嵯山我邊鳴瀧高尾に出る物正下の上
品なり他に類ひ鮮し是山城丹波の境原山に産して内曇又淡黄ともの交丹
波の白谷にも出て是等ともに刀劍の磨石或刹刀其余大工小工皆是を用ひ
又上加戸澤砥は水を用ひずして磨ぐこと上品にして癸河名倉砥は淡白色に
班あり越前砥は俗に常慶寺と唱ふるもの内曇にはあれども以上磨石乃品
にして本草是玄越砥と云長く切りて馬に四本宛負ふすと類矩なり

○青砥は平尾 杣田 南村 門前 中村 井手黒 湯船等なり中にも
南村門前は第一にして七里ばかり東北にして周廻七里ばかり丹波の猪倉 佐伯 苦
野山 扇谷 長谷 大渕 岩谷 宮川 其外品數多肥前に天草 豫
加に白赤等まぐくを中砥とし玄旨各悪の品級盡く每年
つゞる産にしぐ石磨石中砥ともに皆山の土石に接る物なれば山
に此場を穿深く堀入く所くに窓をひらき楔の炊を携へて
石苗を逐ひ今こゝ金山の礦を採ふに等しく石盡めまぐこの搗架
木を取捨こく其山沈崩せこう故に常も穴中崩るゝことやうにこく
思こ〳〵其職工にしてざる者は窺ふこく身の毛をよだつて○石質
よりして其工用に充ることのは下に別記を中にも境磨又塗物の節
磨くに用ひ射馬の虫喰砥なり是こに今こゝに破割物にれぐ刀磨こに用
ざれども浪細工の摸溶こに適用とし但し細の須金などを濤こに溶こに伊
豫の白砥を用ひ此白砥は又一奇品にして谷中に散集こ〳〵石屑に交
これどもに和合〳〵再そび一顆塊の全石にこるなり故に偶木の柔を
挿て和合〳〵奇石の木の葉石とこるこの多くは此山に得る所にして

○礪石

肥前の唐津 紀加茅 中神子 濱或は豫加

生ずるものハ石理稍精〳〵是等皆堀取よハけゝれば一塊を山下へ切落
それを幾千挺の數も須く出る
○工用ハ　刀劒假治よ墓口磨工よ青茅　白馬　茶神子　天
草　伊豫　又淨慶寺等次第よ精を往く猪倉　内景云よ含く
後上引ゝ上引ゝ内景云の石層ゝ但〳〵鳴瀧の地地艶〳〵もいひて猪倉の部よ
用ゆゝ是と　○　剃刀ハ　荒磨と唐津　白馬　青神子　茶
力土ゝもつ
神子　天草よ抵て鳴瀧高尾等よ合せ用ちも　○庖丁ハそゝぐよ
庖丁ハ墓口中砥平尾杣田等よ磨く磨石よ及ぐれば又薄刃菜刀の
類ゝ荒磨ハ墓口　白馬　青神子　茶神子　白伊豫上ハ引ゝて色
付ゝと　○　淺ゝ唐津　神子濵よ磨ぎて豫刃の赤ゝて濁ゝり
○大工ゝ箱細工指物等ハ門前　平尾　杣田の青砥よりけく鳴瀧　高
尾等よ磨ゝ　○料理庖丁ハ山城の青　○小刀ハ南村　○竹細工ハ天草
○針毛拔ハ荒磨を土佐ゝ豫刃白赤よ淺く　○形彫ハ豫刃白

○紙裁ハ杣田　大抵かくのごとく凡工用ゝ所ゝ硬ゝ物ハ柔和なるよ
抵て柔軟なるハ硬ゝよ磨ゝ　○ものゝ金質石質相和ゝる自然
いうて一概ゝハ定ゝ難ゝ

菌之菌品

地よ生ずゝ菌又蕈ゝ云ふ木よ生ずゝ蕈ゝ云菌ハ和名鈔タケ蕈ゝ
キノコゝ訓ゝ菌よ數種ゝり木菌キクラゲノ類　土菌ツチヨリ生ズル類　石菌イハタケ
ノ等よ〳〵て品數甚多〳〵是宋人陳仁玉菌譜を著ゝて甚詳ら
なり本草よ云凡菌六七月の間溼熱蒸〳〵て山中よ生ずる菊甘
滑ゝ〳〵て食〳〵ゝ云ゝ云ゝ菌譜本草よ載ゝるゝの本朝よ
在所多〳〵ハ同〳〵ゝ云ゝて悉ゝ辨ゝがゝ〳〵　○是と俗よクサヒラ
ゝいふゝも和名抄ゝゝハ茱萸蹠ゝクサビラ中國及九州の方
言ゝるはゝ〳〵尾張邊よはみゝゝ云

○芝

俗ニ靈芝ト云フ一名 科名草 不死草
福草。和訓又カトデタケ。サキ

本草ニ五色芝ト云フ仙藥ニシテ南山の四皓芝ト採茹テシテ群仙の服
食トスル又五色の外ニ紫芝ハ以上六芝ニ分中ニモ紫芝ハ多ク地
上ニ生ジテ泉石中或ハ松樹下ニ生ジ物生黃色ニテ日ヲ經テ赤ニシテ帶ビ長ク紫褐ニ至黑
ニテ光澤ハ芝の裏ニ孔ニ滑ニシテ味ヒ五ニシテ五味ヲ備ヘ是一
案ニ三度花ヲ開クの瑞草ニテ日本延喜式ニモ祥瑞の部ニ見ヘタリ
瑞命禮ニ王者仁慈ニシテ草生ジテ芝ハ是ナリ○其形
一本離テ生ズ生ズルモ又叢ニ生ズルモ又一莖ニ重ニ生ジテ
ヒタケのごとき物ハ又莖枝ヲ生ジテ傘ハ多クハ又ナシ
莖の長サ三尺ニシテ枝ヲ生ジ鹿の角のごとキハ是鹿
角芝ト云フ高品ニシテ千年伊勢の山中ニ出ル凡ク芝の品類六
百種斗尚奇品の物本草綱目ニ委シ○冊後ニハ首途祝ヒテ是
を饋ル伊勢ニテ萬年ヲケトヒテ正月の辛盤ニ飾ルヒヒ子ジ
ヤクシトイヒ仙基ニテイヒテゴシヤクシトヒテ痘瘡ヲ癒クナリ
胡孫眼 是芝の種類ニ本ニ生ジテ莖ナシ大ナルの四五尺モ及ブ

○香蕈 ○一名 香荒 香菌 處蕈

日向の產ヲ上品トスル多クハ熊野邊ニモ出セリ椎の木ニ生ズルト
本條ニモ但シ自然生のハヨシ故ニ是ヲ造ル椎の木ヲ伐テ兩
ニ朽ヲ末洋ヲ沃ギテ薦ヲ覆ヒ日ヲ經テ生ジ又櫧の木ヲ伐テ
他ニモ採テ日ニ乾サシ夕夜ニ乾ヲ故ニ香氣全シ又生乾シ
本ニ生ナガラ乾シテ香味甚佳美ナリ是漢名家
蕈トハ形松蕈のごク莖正中ニ着クものを眞トス又漢ニ雷

菌とも物にも疑ひらくに似て蕈の類なるべし通雅云椿榆構杯を斧とそたくうち斬て其皮をとる久雨に爛かゝ米潘と沃ぎ雷に音を閃けハ蕈と生ぜ若雷鳴ざる時ハ大斧とそたく是ハ擊てゞ忽蕈と生ぜとも云て是香蕈と他ろ法のごゝ今和名吉野又伊勢山などゝ他生せるふとの日向に勝もう其法ハ扶移の樹と多伐て一所によりてめゞ〳〵土に埋免垣と結まゝて風を厭其まゝ晴雨に暴てこと凡一年斗経て腐爛〳〵そとを候ゞひてかの斧とそたく擊て周と入置くのゝて米泔と沃ぎてもなゝされども其始て生ぜるをとくるく大抵三年の後を十分の盛ゝとそれもう毎年に生ずるのとくなれぞ又斧と入生たく年と重ぬなり春夏秋と生て冬ハなゝ其内春の物を上品ゝて春香と称て夏ハ傘薄く味も劣もう又別に雪香とそたく絶品の物ハ縁も厚く形勢も全備て是ハ春香の内ゝ撰生せるとのて裏ども潔白なるを称せり

○石耳　一名　石芝

熊野天狗峯の絶頂に大巖にて其上に多く生ぜ皆山石上乃嶮にして夏月火熱の時ハ甚小ゝて松葉のごゝ面黒色裏青色形木耳に似て茎なゝ黒ゝ而岩に附て生ぜ是を採に採て縄にとをけ縄にとをゝ或ハ番に乾て木の枝に釣りなどの所為ハ図のごゝ其の花を作ゝさに似て猿の木ぞゝふるもやをゝ鶯の子とうくのごゝ採ゝとる今に吉野に生ずるとのを上品とす

附記

此余蕈の品甚多〳〵○松蕈ハ山孔の産とゝ大凡牝松に生ずと故に西國に牡松多ゝ故松蕈ハ少なゝして茯

熊野の
石苴

苓多〳〵京畿ハ牝松多さゞもて茯苓少なし〳〵○金菌ハ冬春の間に生じて松蕈に似て小さし○玉蕈○布引蕈○初蕈裏緑青のごとし尾張遠江にてハ○湯蕈西國にてハ冬生ず○天花蕈高野に多く出る諸国にも生ず○舞蕈ひらたけに似て一茎に多く重なりて針乃ごとし小さくして尖ハ紫なり○木耳ハ樹皮に附て生る初生ハ淡黄色にして赤色を帯たり採て乾せば黒色に変ず日本にて接骨木に生ずるを上品とす○柔蕈ハ二種ありてかさハ柔の樹の胡孫眼なり軟なり食用の木耳なり此余槐榆柳楊櫨なども皆蕈を生ず○杉菌ハ杉の切株に生じひらたけに似て除山に多し○葛花茶葛の精花にして紅菌も此種類なり是に一種春生ずるものを鶯菌又さゝけといひ丹波にて赤蕈南都にて仕丁さけ等の名あり○藿菌ハ蘆荻の中に生ずる玉蕈なり九月比に出る○蜀格ハハリタケ共云常に針蕈に異なり本條ハ傘を張てせゝかさの裏に針有て白味苦し○地耳ハ陰地丘陵の樹根に多く生ず脚短く多重生ず面黒く茶褐色の毛ありて裏白くして刻なし皮蕈ハ色黒して此同種なり黒皮さけも是に同し○蕈類大抵石のごとく此余毒有て食用にせざるもの多し○ひろひたけ竹蔭竹林中に生じ土菌ハキツネカラカサともいひ是も鬼蓋地茸鬼茸の種類なり

○蜂蜜 一名百花精 百苔蕊

○凡蜜ハ蜂の所諸國皆有中に紀州熊野と筑州藝州是に亞ぐ其外勢州尾州上州石州筑前伊豫丹波丹後出雲等に昔より生せり又舶来の蜜ハ下品なり是ハ砂糖又白砂糖を製して是を試るに和産の物ハ煎ずれば蜂おのぼり聚て舶来

熊野の蜂蜜

の物ハ聚ふこゝろ〳〵しをとゝ法く知ふ○蜜ハ夏月蜂脾の中ゝ
貯つゝ己ゝ冬籠ゝの食物ゝせんがためゝ一種人家ゝ自然
脾と結ひ其中ゝ貯ゝ物を山蜜ゝ又大樹の洞中ゝ脾と結ひ
貯ゝ木蜜ゝ以上態野ゝ山蜜ゝ上品ゝ又巖
石間中ゝ貯ふ物を石蜜ゝ云又家ゝ養て採ふ蜜ハ毎年脾を
采ゝ去る故ゝ氣味薄く是ハ家蜜ゝ脾ハ炎天ゝ乾ゝ下ゝ
器ハ兼けて解け流ふ物ゝ蜜ゝ上品なり漢名生蜜法一名
槽ゝ入て炭ゝ焚て取なり但ハ又脾を取り潰ゝ蜂のまゝして研
火氣の大武毫厘の多を候ゝ水を入て煎て絞ゝ採ゝ絞ゝ
角の花の性ゝ成て數色ゝ変ゝ漢名熟蜜凡蜜ゝ定る色なゝ皆方
○畜家蜂 漢名 花賊 蜜官 王腰奴 花媒
家ゝ畜ゝんと欲ゝ成ハ先桶ゝ入て箱ゝも作り其中ゝ酒砂糖水ゝ
どゝ法ゝ蓋ゝ孔を多くゝ付け〳〵大樹の洞中ゝ結び〳〵窠の傍ふ
四ゝ蜂ハのぞゝ其中ゝ移ふを持ふて蓋を更てめく
簷端或ハ牖下ゝ懸寘なゝ式箱桶の大さゝ規矩ゝ定れ
ど諸孫等しからぐ先九角邊一家の法と同くして箱なれぞ
九寸四方ゝ貳尺九寸ゝて是を限ゝ掛ゝなり或斜横ゝ畜ゝ
の考ゝ其箱の材ハ香のゝ物と忌て かならぐ松の古木成
用ひ是又鋸のゝて鑱ゝ削ふを忌む板の厚さ四歩斗四方の
耳と隨ふかゝ〳〵造ゝ法く繩とかまぎれぞ後ゝ甚重なゝてれ
のぞゝら落損ゝるゝゝ上下二枚ゝて下の方の上ゝ寸
八厘横四寸斗の隙穴と開て蜂の出入のゝ若一二重も廣く開
まゝ山蜂拆ゝ窺て大きゝ蜜蜂と擾乱又大王の生も成穴ゝて
小き物ゝ箱の數ハ家毎ゝ三四と限ゝ其余ハ隣家ゝ軒ゝ往ゝ借て畜
○造脾 尋常の房の撞乃如ゝ物ゝ同ゝ穴も下ゝ向ゝ
ゝ〳〵只箱一ゝゝゝ造ゝ穴ハ横ゝ向ゝ人家の庭の家乃如ゝ先

箱の内のとちまつ月のごとき物と造てはゞ先ゞ下一そひ両脇共
に盈〜む其厚凡壹寸八歩或二寸半両面〜う六角の孔數多を
穿て板襠の膜に似く孔涼八九歩是のごと物と幾重も製て其脾と
脾との間狹人の指の通る程究の陸にう蜂其陸に入うん下うう潜う
全躰脾を下迄八盈さむとゝなり脾の形或八正面或八横斜なるに
て大抵ハ〜其孔に子と生ミ又蜜糸貯又子の食物の花を貯ふ又
子成育〜て飛ゞ出入るに及べゞ其跡の孔へも亦蜜を貯ふ凡蜜
はじめ甚淡〜き露なり吐積んゞ日と経ゝ其芳日毎に進ること
實に人の酒を釀るに等〜既に熟孔に盈る時に其表を閉て一
滴一氣と洩ることなく蜂の數多れゞ氣味も厚〜
○蜂ハ　小なるゝ大きさ一歩計て凡八千に似く黄に黒色を帯多
群ゝく巣とする物ハ巣を造ゞ巣を造るのハ花を採らゞ時〜八昏
方て其役をいらゝむ夫ゞ中に蜂王とらひゝく大きなる蜂一つゝ

其王の居所ゝ黒蜂の巣の下に一臺をかまへ是を基とつふその
王乃子ハ世〜代〜王となるゝてえらう花を採ることゝ毎日群蜂輪
値に花を採ゝて王に供を是一桶に一介のゝなるに子と産むこと
雌雄ゝる物に同〜道理にあたいてはゝ希異なり群蜂是に従待ゝる
こと實に玉體に向ゞて〜又黒蜂十斗ゝて是を細工人と唱ゞ孔口
を守ゝて衆蜂の出入を撿ゝ若花を持ゝて孔に入らんとするもの
ハれゞ其懈怠を責て敢〜入ることを許さゞ若再三に意る者ハ逐に
螫殺〜て軍令を行ふに異なゝゞ凡家にゝるふも野にゝるも儀に
たゞしゝ〜

○頒脾　大王の子成育に至ればゝ孔を出ふに群蜂半従
がゝ恰も天子の行幸のごく擁衛甚厳重なり其花行と大抵五
間ゝう十間の程ゝて木の枝に取附ハ其脊其腹に重ゝるゝこと枝分
垂ゝるごく一團に凝集て大王其中に核のごく裹まり畜人是を逐て

袋と群蜂の下ゟ羕けて羽箒と以て枝の下を掃ごとくゟ切落せバ一團の
まゝゝて其袋中へおちる其音至く重ごゝ〜（今世袋を鈴ゟて俗ゝて衆蜂の気と恐ゝむゝ）
〜蜂孔ろゝと是を用意の箱ゟ移〜畜なゝを脾ゝゝまとゝく〜人の分来
ゝろゝ等〜若其一團の袋へ落るゟ早く放る者にゝて大王の従行
ゟ洩ゝく其至ろゝと紛らゞ又原の巣へ飛帰る時ハ衆蜂敢て乱ゟ
ゝふゝを不許爭ひ起〜是殺蜜殺〜其不忠を正ゝる似ゝ見る
人慙愧〜て歎涙を流せゝ又八ゝさいごゝて昼八ゝ時ゟハ衆蜂不殘
桶の外ゟ弦ゝれ〜稍羽根と鳴ゝゝゝゝゝ三月以蜂の分散ゝる時彼
王一群ごの中ゟ必一ゝゝ巣中ゟ王三ゝゝゝふ時ゝ群飛も二ゟゝる
其時畜なゝふ人ゝゝ沃ごて其翅残湿せゞ蜂外へ分散せゞ皆孔器
中へ還る故ゟ年〜畜なゝふといゝゝ

○割脾取蜜　是と採ゝゝゝ蕎麦の花乃凋む時と十分甘芳
の成熟〜ゝ採らんと欲ゝる時ハ先蓋とホトく叩けバ蜂皆脾の後

ゟ移其時巣ゝ三分ゝ一を切採三分ゝ一を殘せゞ再其巣と補原ゝ如く〜ゝ
幾度とゝゝゝ冬ゟゝゝゝ脾ゝゝ熟ゝ蜜ゝ〜（一種土蜂ゝゝゝゝ丸ゝ斗
土を添く空ゝ其中ゟ脾を結ぶ是ゝゝ蜜乃〜南部是とデッチスガリとゝ但し
スガリゝ蜂の古訓なり古今集離別ゟ　ゝゝゝなく秋の　又原山
萩ゝ原ゝゝゝゝゝ〜たびゝゝゝゝゝゝゝ
崖石上ゟ自然のゝゝ数歳と往く已熟ゝゝゝゝ物にゝゝ土人長江等
とゝゝく刺て蜜と流〜採ゝ或ゝ年と往ごゝゝゝゝゝ板緑取ゝゝ
箱ゟ畜なゝふの絞て蜜ゝゝゝゝゝゝ二十斤（百六十目一斤）蜜蠅二斤と得ゝゝ
此二斤のゝゝゝゝゝゝ桶箱修造の費用ゟ抵足ゝゝゝ

○蜜蠅　一名　黄蜻

是黄蠅とゝふ物にて即蜂の脾なり其脾と絞ゝゝゝ清なり蜜ゝ
蠅と取ゝゝゝ生蜜を采ゝゝゝふ後の蜂乃巣と渦ゟ入ゝゝゝて面ごし

佛そゝふ時別の器に冷水を盛りて其上に籃を置きかの前いぶたるを移せば澤々藍に出でて蠟は下の器の水面に浮ぶまゝを又陶器に入れて重湯とゝのれば自然に結び蠟となる又熟蜜とゝる時鍋にて佛せば蜜は上に浮び蠟は中に在脚は底にけり是を冷して自然に黄蠟に結ぶ

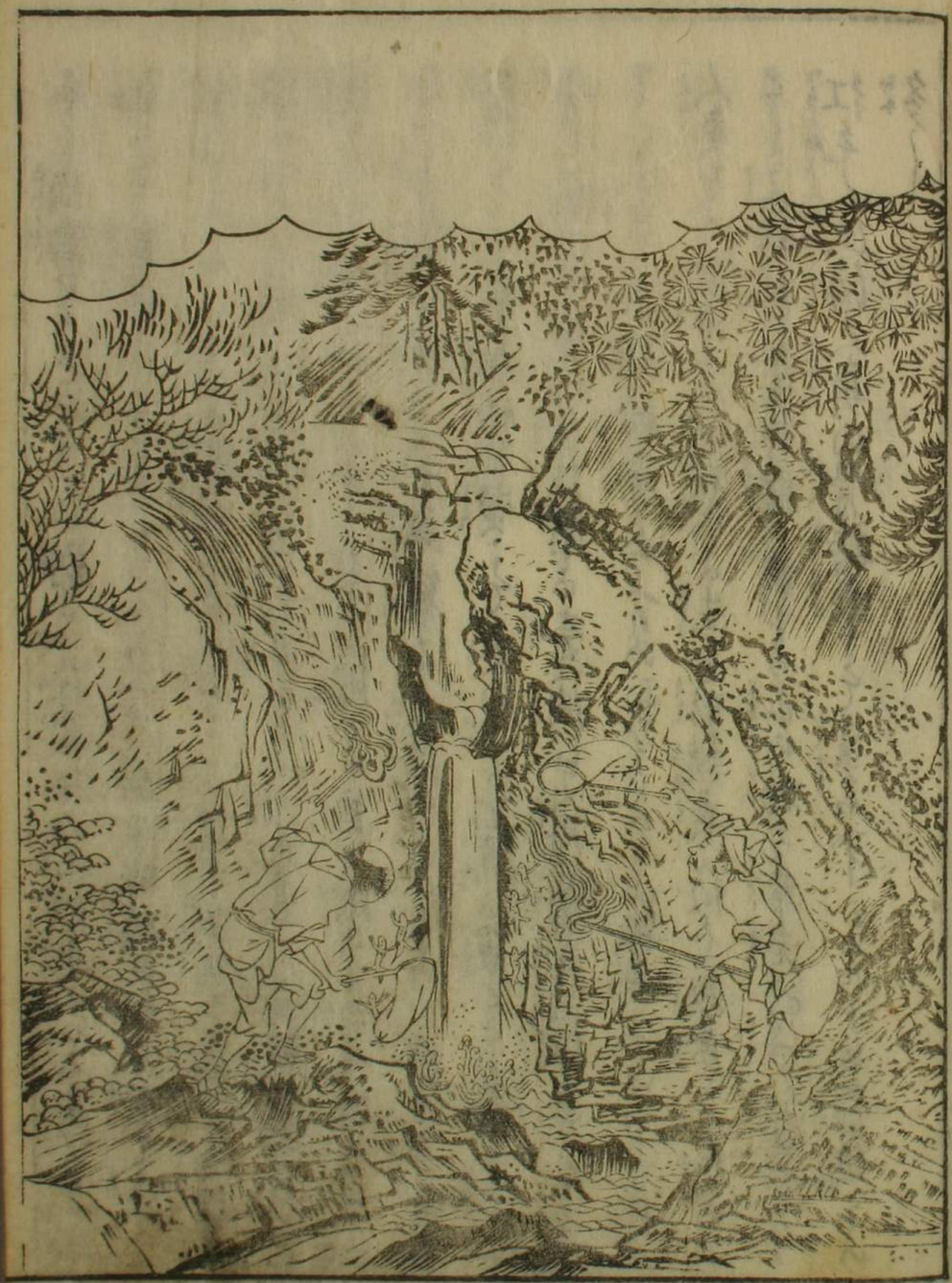
○會津蠟

本草蟲白蠟といひ奥羽會津に採る蠟なり是はイボクラヒとゝふ虫を畜なして水蠟樹といふ木の上に放せば自然に枝の間に蠟を生じて至て色白し其虫は奥羽にのみにして他國になし故に形と詳らかせざる今他國に白蠟といふものゝ漆の樹などの蠟と暴くそゝる白色なるまゝ藥店にて外療に用ゐる白蠟といふも蜜蠟の暴くそゝるを是又眞にけらば水蠟樹といふ木はそこくに多し

葉は冬に似て小なり夏は枝の末に小白花を開きて花の後實を生じ熟して色黑く鼠の屎のごとし冬は葉たれり　又武蠟或刀劍に塗るに久しくもつて鋪と生ぜば又疵に貼ぜば自から落る故にイボオトシの名あり今蠟屋に售る會津蠟といふ物は眞偽ばかりなし

○鯢

溪澗水に生じて牛尾魚に似て大なり茶褐色にして甲に班文あり能く水を離れて陸地を行く大なるものは三尺に甚山椒の氣あり又椒樹に上りて樹の皮を採て食ふ魚畜おけらを常とす小兒の声乳ごとく性至て強き物にして常に小池に畜ひ用ゐる時其半身を截斷其半を復小池へ放ちおけば自ら肉を生じ元全身となる故に作劣の方言にハセキとゝふ又其去る皮も久しく



えせうを
山椒魚

ゑく尚動なりとゝう○別に一種箱根の山椒魚とゝうのゝ小
魚なり蛾後にてセゲハンウヲとゝく其形水蜥蜴に似く腹も赤し
故にアカハラともゝ人乾物にして出〳〵小児の疳虫を治す物理小
識に風高の源に黒魚ゝうとゝ是なり今相模信濃軽井澤和田の
邊にゝ生る物もかのいゝのごゝく紀物にて表る渡の左右の岩に攀上
なり土人是を採るに木綿袋にて玉絹のごゝくに底を巾着の
口のごゝくにして松明を焚て魚の上るを候ひ袋とさゝ附て腐ら
ぬゝを取て袋の尻を解き壺納し又丹波但馬土佐にも出せ
ア○本草に一種鰍魚とゝいのおなじゝく山椒魚ともいひ是ハ
人魚なり河中及び湖水に生て形鰐魚に似く翅長く足のゝ
ゝ〳〵又時珍の稽神録に載る所の物に華考に海人魚なり
紅毛人氏海人魚の骨持来りて蛮名へイシムルトゝ甚偽ゝの
多〳〵

○葛　葛穀　一名　鹿豆

葛草なり根を食是葛粉葛根とゝ粉ゝゝを葛粉ゝゝ吉野ゝう
出ゝとゝの上品ゝゝ今ゝ紀州に出ゝ上品ゝゝ是全く他物を加ぬゝぞ
佳味なり是全く他物を加ぬゝぞ多〳〵中華に家園に種ゝ家葛ゝ云野生のものを野葛ゝゝ
日本にては家園に栽ゝ出ゝるゝ葉ハ遍生に似〳〵三葉一所に着
て三尖小豆の葉のごゝく毛ありて莖葉ゝも毛茸ありて七月に
紫赤の花を開きて紫藤花のごゝく穂を成して下に垂る長
三寸斗莢を結〳〵是又毛ありて久月根成堅て石盤にて打抑
き汁を去つゝ金杵にてよく〳〵舂細骨末となして水花數度の飽の
しめる盆に盛て日に暴〳〵桶に納る出ゝと　和方書是を○葛根ハ水粉ゝゝ
藥肆に生乾暴乾の二品ゝう○葛を水に浸〳〵皮を去つゝ編連

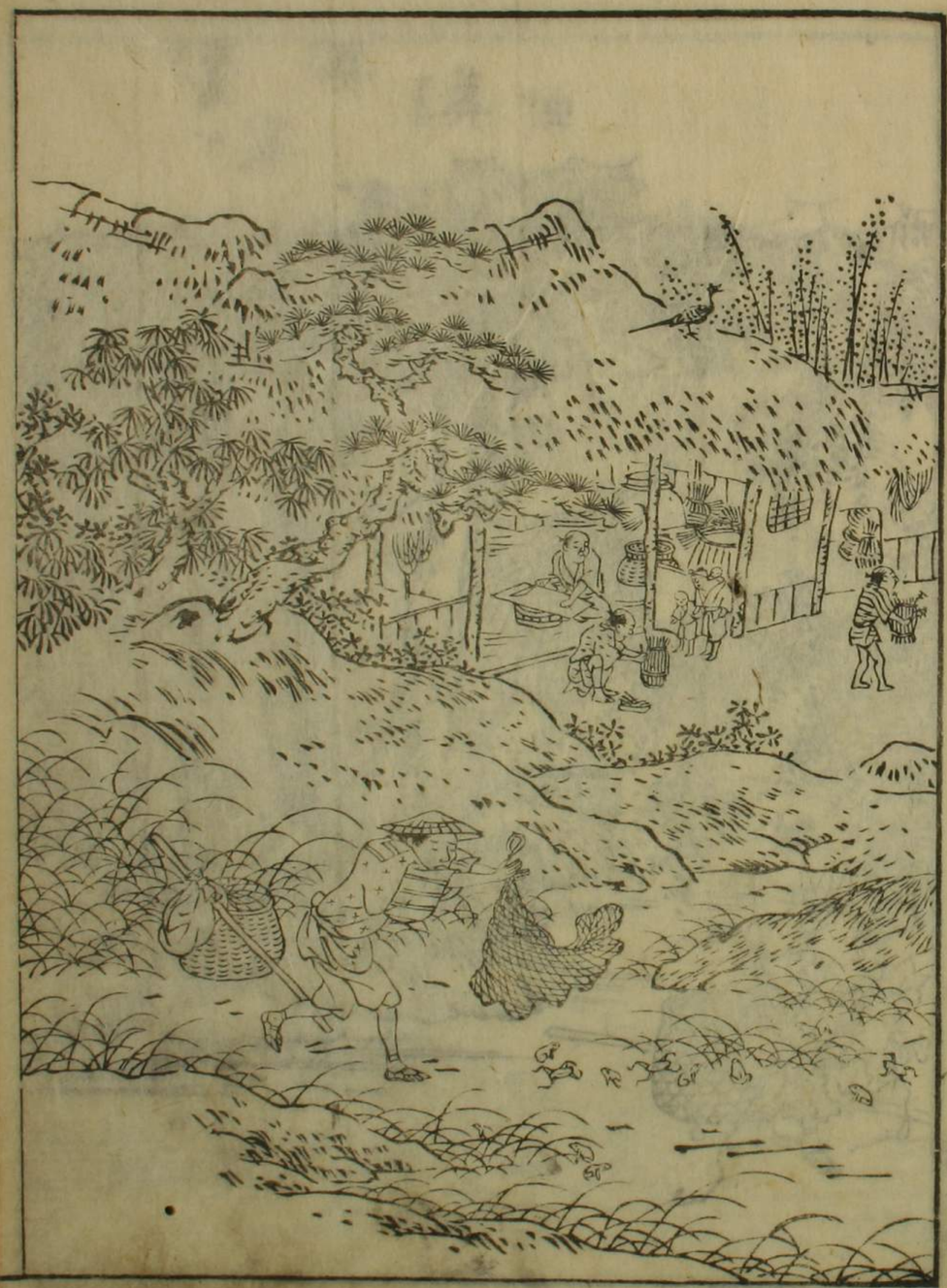
吉野葛

ねゝ器とゝ是紙葛麓といひゝ水にて製とるこの是なり葛笠竜
ゝ蔓紙にゝねそゝの名なゝ○葛布ハ蔓を煮ゝ苧のごゝ裂
紡績ゝ織なゝ詩經に絺綌と云ハ絺ハ細糸綌ハ麁糸にして古
中華に織るの今の越後縮のごとゝもいるゝと見るゝり○クスゝ云
ハ細骨の後にてこの粉にをそこの名にて草の本名ハ葛なり
フチゝ帰鞭なり衣製是とゝ作ゝ鞭とゝ故に呂ゝ表裏を葛
衣とゝゝ葛布なれゝなり
これ蔓葉根花皮ゝの民用に差ゝり故に遠村の民ゝ親屬にを
携へ山居にて堀食ひ高ゝ生ひゝ粉にゝ時ゝ山下に生ゝこれを
紡績ゝ皆今に益ゝ救ゝ事五穀に亞ぐり○蕨根も亦是に亞ぐて
同ゝく水粉とゝ其品賤ゝきれども人の飢を救ゝにおのゝはその
功用貴ゝとゝ○伯夷叔齊ゝ首陽の山居も此ゝりて生を保てり
仍物ゝ生熟とゝゝく制ゝ
特異佳ゝゝと

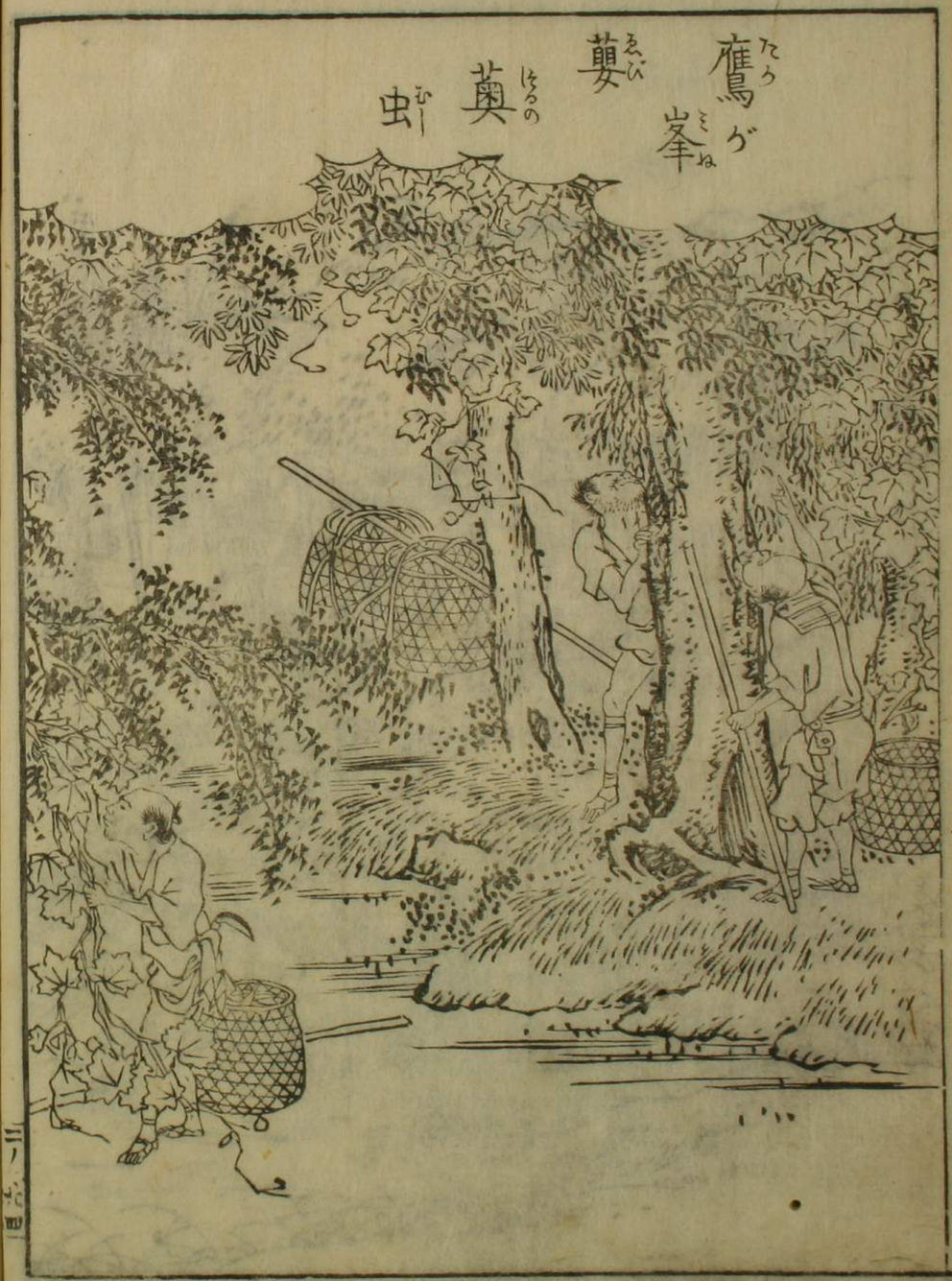
○此余葛粉の功用甚多ゝ或ハ餅又水麺に制ゝ白粉にをゝ
糊に適ゝ料理の調味にしさはぐゝ人に益て
○或書云葛ゝ毒抜除くとゝゝども其根土にゝろと五六寸に成葛
脛こゝひてこれ頭なゝこれ紙後にそれぞゝへに生せゝ

○山蛤

山嶺嵯峨又ハ丹波播磨小丹の山ゝ多ゝ生ゝ又摂津神崎の邊にも生せ
ども其性宜ゝからず凡笹原茅原のくゝにゝにて是をとるに小さ網にて伏
又唐網のごゝれる物の龍頭と両に挟こゝ廻にゝくひ刺りて折ゝ
網さゝくとまいつて三尺四方許に廣がるなりかくし得ゝ腸を抜き乾物
とゝて出ゝ其色桃色繻子のごゝゝ見ゝ足甚長ゝ自ハ扇の要に似ゝり但ゝ今
市中に售るもの偽物多ゝ○本草綱目に山蛤を蝦蟆ゝり大きゝ色黄し
とゝりて日本の物にハ蕎合せゝ異にゝるの由ゝ記ゝ紀大和本草



山蛤


鷹ゞ
峯
蓑
蔓
虫

又長明毎名抄と引て井堤の蛙是なり晩に鳴さて常のかゝ〻に變れり
色黒き様にて大きさにもよりぶらくさて山蛤に元そるへたぼつなり

○蔓菁蔓蟲　本の一名野蔔蔔

山城國鷹ヶ峯に出る物上品とす蔓菁葉花實ともに蔔蔔に異ることなし
詩経六月蔓菁を食とは是なり春月萌芽を出て三月黄白の小花穂をなす
七八月實を結ぶ〻て多く色薄紫其茎吹く氣出汁を通ずの
ぐ〻蔓に往々盈をなる而りて真孤の根に似り其中に白き蟲ありて
是小児の病を治する薬なりとて枝も切て市に售る然る氏茎中に
蟲ありこれ和漢の書に於て見ることなし柳の虫常山のむしもこれに病
薬とすれども尚彷彿とい云り南都に眞の蔔蔔なし氏實を採て接と
去て奠懷して膏のぐ〻食用とす又葉の脊に毛ありて乾てよく採ぐ
艾綿のぐ〻是にて附贅を治と故に イホたゝ名ありて中華に酒に

釀〻蔔蔔の美酒鬱金香と唐詩に見たり
和名ヱヒスブトウとい久〻〻詩に蔔蔔のことにて蔓菁
イヌエヒスブトウとゝりこれをもちゐ〻てつひ〻〻なるべし

田臘品

○鷹

甲斐山中　日向　丹後　伊豫等に捕るの皆小鷹にして大鷹ハ奥
加黒川　上黒川　大澤　冨澤　油田　羊遣　大瓜　矢俣等にて
捕なり志のぶ郡にて捕者凡く志のぶ鷹とい云り白鷹ハ朝鮮より来りしく
鶴雁を擊つ者是なり　鷹と養ふ素ハ朝鮮と原と〻て鷹鶻方とこゝ書
り故に本朝仁德天皇の御宇依網屯倉の阿珥古鷹を献せ〻に其名さ知
後ハざりくと百濟の皇子酒君是ハ朝鮮にて俱知と云鳥なりとて韋緒小鈴
と着て得馴て百舌野遊獵に多く雉子を捕る故に時人其養鷹せ〻處を
号て鷹甘邑と云く今の住吉郡鷹合村是なりされど我國に養ひ始し

張切羅紋
をらて
鷹を捕

事朝鮮の法と傳てうとうとうそう○捕養の者凡巣中に獲て養ひ馴き
しむ其中は伊豫國小山田よりは罠羅して捕もつ式山は土佐阿波三國に跨る
大山なり、されば鷹い高山を目かけてとろうまるのなれば必式山よりも
凡七八月のころ柚の實の色付かゝるを渡て来るの期とす
○罠羅いとう切羅といひて目の廣一寸或二寸すゝ糸にても苧にても作る堅
三四尺横二間許なると張りて其下に提灯羅とて長三尺ばかりと周徑一尺
斗のもの糸の羅に鶏を入て抗に結ひ付て其傍に木を立て蛇の形の
ちく似るを作の筒に入るゝ様に付く夜中に仕かけ置き早天に鷹来
来て生く求食と見つけ寄ゝ蛇の糸を引く鶏のかゝる目うけ動き
ハ驚て騒ぎとんで鷹是を捕ん〻と下て羅にかゝる両方に着たる作式袍
袴をぬゝて能く走る様に志かけし物にて鷹の纏とる
捕まつり式羅を張る窮屈にして是に庸場のとゝはたらとい
猟師皆惣髪にして男女ともかさ〻冬も麻と重て着せり○此に捕る鷹多
ハ鵠又ハシタカともいへり兒鵠の鳴なり逸物ハ鴨鷺鳶とう白鷹の似小
其班ろく有○かく捕て獲て後山に猪山大猪と差ろう行ものも芋と汲て飛
ちらすよりとゝ知れ揉度を用ひ旋い竹の管又ハ鹿の角にて制ろ小鷹ハ低に
て尾羽をこう樊籠に入て遠く里に售く○他國又奥羽の大鷹ハ巣鷹とこそ
巣ごう捕ろう其法未詳○餌ハ餌板に入く差入飼○大鷹ハ尾袋羽袋を
和らこなる布にて尾羽の筋に如縫附る其寸法尾羽の大小に隨ふ
○以捕時異名
赤毛 一名細紙 初秋 黄鷹 巣鷹 巣に居ると捕ろうと 巣廻 五六月巣に居る 野曝鷹 山曝木曝 五七月十月
捕ろう里落鷹 十二月に取ろう物の名 新王鷹 清月に捕ろう 佐保姫鶫 小女鷹 小山鶫 山野にて毛を変ずる 鶫 一名三月鶫
○鷹懐
獲たるまゝなるを去れろ〻とつゝに是に人肌の湯を少く尾羽背の廻に餌を
を能く洗らひ嘴爪を切て足緒とさして表据とするなり表据といふ
人に馴そると視候表塒を開き燈を用ひどもに据く山野に徘徊し表を繰に

はいく燈を出に見せ又夜とかさねて次第にちかつくれば是は若始より火の光
に驚かせては終に癖となりて後に水に濡たる羽を焚火に乾すなどさせたるも
其外数多害ありさて夜据積りて鷹熟さするふるひ身せさせなどして
和らざたる形見へく朝据をするなり是は未明より次第に朝を重ねて後には白
昼に野へも出せり其時肉よくなり野鳥を見て目かくるん形あらはしかねて狩し
小鳥を見せてよ迎へさせて是を捕らせり但し其小鳥の觜とさかうけるひへ
掻くりて見る鷹を啄て毛を立させざる為なり若毛立などして鷹おどろけば
終に癖となると厭べきなり是を腰丸觜形するなどいふなり此鳥よく取得たる
時は暖き血肉のとおし飼ひくて多く飼ふべし肉ふとりて悪し尚生育に
心を附く肥る瘦る又は羽振顔貌などの善悪或は大鷹は瞳の小さくなると肉の
よさとし小鷹はこれに反し又尿の色をも考へ能く調へさせて是を肉とこしらへふとらせ飛流
の活鳥を飼ふ（飛流しとは鳥の目を縫ひ野に出し高く飛せて是を手際よく取せ又は羽合するなり）是を手際よく取せて来る
山野に出て取飼すなり

○巣鷹は巣より取りて籠のうちに艾葉兎の皮を敷きて小鳥をを
細かに切りてかくすべし水を交へて○初生とのり未綿毛なき又
村毛はえたる毛と生育の次第あり 尾の生をもつて成長の期として
一生二生三生をといふなり三生に及べは籠中に架をさしたる
初より籠に蚊帳をたれて蚊の螫を厭ふ又雄形兄鷹といひ雌を弟
鷹といひて是をこのとき軽重をそろへて軽き形兄とし重きを弟
とす又尾羽延び揃ひかたまりたる後は足緒をさして五日ほど架
にはなさで静かに据て三日ばかり温湯を浴せるなり若浴ざればふ
きかけて度を重ね縮りたる羽を伸し尚前法のごとく活鳥をまろ
そして後には常のごとし

○鷹品大概

角鷹 蒼鷹 黄鷹ともいふ 波廝妙 雌とも兄とも兄知らざるをいふ 鶻 雄なり形小し 隼 雌なり形大なり仕ふに用之 鶲 雌なり

兄鷹 鷂ノ雄なり 雀鷂 鸇ともいふて品多し 黒ー 木葉ー 通ー 熊ー 北山ー いづれも同品なり府をそろへて別るか 雀鴜 つこまくり小なり 鳪

鳩 赤鳩 青― 底― 下― 裏濃―

○鷲 全躰黑〜年経て白き斑種くは変じて ろは毛ハ黑く眼ハ赤〜嘴青く脛は毛あるを鷲とそうべし

鵰 全躰黑〜尾の肩羊を孫て拔くるは変じて ろは嘴黑く 其外品類多〜

青を〜青く足青く脛は毛ろをへまたろとしき

まくそはくそ 悟鳥も種類なり

くそはくそ

○任鳥

大和本草云鷹鶻方と擧るは鷹ハ類三種ろ鶻鷹 鷲ろ〜今要ぞるは

白鷹鵠角鷹ハ鷹ろ○隼鵰ハ鶻なり○鷲鶩等ハ鷲なり鷹鶻の二類

ハ教て鳥とゑ〜む鷲の類ひも教〜く鳥ゑ〜めゑ又諸鳥ハ雄大なり唯鷹ハ

雌大なり比事中華書にもえそろ尚詳ろるとゑ原本よりてえぐ〜しは略を

○ 鳧

○鳧ハ摂加大坂近邊ハ捕るをの甚美味なり北中嶌を上品とゑ河内

其次なり是ハ捕ふは他國ろてハ鴨羅といへども津の國ろてハシキデとそ

横幅五六間は竪一間斗の細き糸の羅を左右竹ふ付てえるは三間程

ぐ〜隔て〜三重四重は張るなり是ハ殿先云○又一法は池の辺ろて竹は

黐を塗て横は多くさ〜置ハ鳧渚の芹など求食とて竹の下を潜ふ

は觸きて黐はかゝ為是をハゴと云○又一法は水中は有る鳥をとるふ

は流〜黐〜とせ藁葉は黐を塗て川上より流しかけ廻はまとしてせ

て掬ふ○又一法は高縄と云有是は池沼水田の鳥を捕るゑなり先つ

黐を寒は凍らざるゑ油弐加えく是を一度煮て竿は塗て轤り

巻取て両岸は篠竹の細きを長さ一間半なるを間一間半ろ

一本宛立並べ右の糸を纏ひ張る事図のごと一方は向ひたる一本

ぐ〜は竹は尖の切うけの笘は油を塗て糸の端をかけ置き鳥はか

うふは付て笘ろゑれて纏ろ〜と捕ふ是弐掛が落ろしふ東西の風は

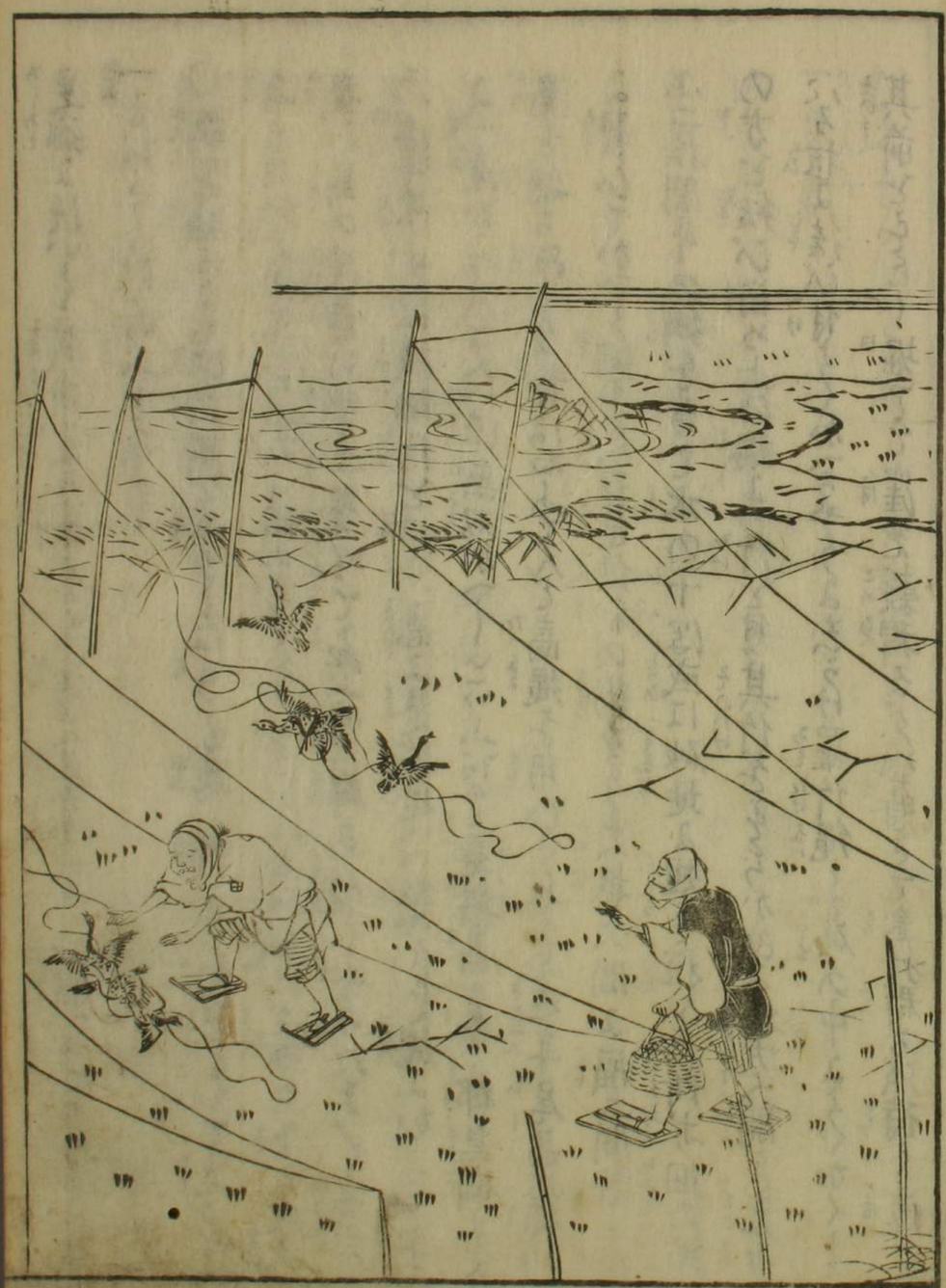
ハ南北は延き南北の風は東西はひき必風は向ふて張まゑと待ろ

又鴨群花〜て糸の皆落る弐物ぞまゑろと云獵師ハ水是袋とて喜まて

作ろゑ沓をとき又下はなんぞと云物を副差とて沼ふけ田の流上を

行は便利ゑ又鳥の朝下〜と霄は下〜とは水の渭を以て知ゑ又

高縄をもつて鳥類捕



足跡よりいく其あとまるを考へ且来るべき時刻をたがへるよ
一も違ふべからずとなり
○鷹を捕るも武高縄を用ひるはえども鷹ハ鴨より智さとくてえよう
あも目のあたりふとの方より飼の多きよハ下アビに土砂れたる地より下らず或
番ひ鳥の其邊徙迴ひて一聲呼てあゝ時ハ群鳥隨て去るたまく高縄
乃邊より下をば禦師竹とゆく急より是を追へバ驚きて縄にかゝりて十
より一度なり○又一法無双がへしといふなり是摂津嶋下郡鳥飼う
鳥を捕る法ろう昔はおゝてんと高縄を用ひられども近年尾張ハ禦師
より習ひてかへ網を用ひ是便利の術なり大抵六間より幅二間許の網
小二拾間斗の綱を付て水の干潟或は砂地より短き杭を二所より網の裾
の方を結び留め上の端より竹を付て其竹をとゞかひより両方へ開きえあ
ゝる抵より結び付ようかへるやうなる法ろう羅竹縄も砂の中へかくし
其前とゝこゝ堀りて窪を穀稈るゞ或時きて鳥ハ群る或待く遠く

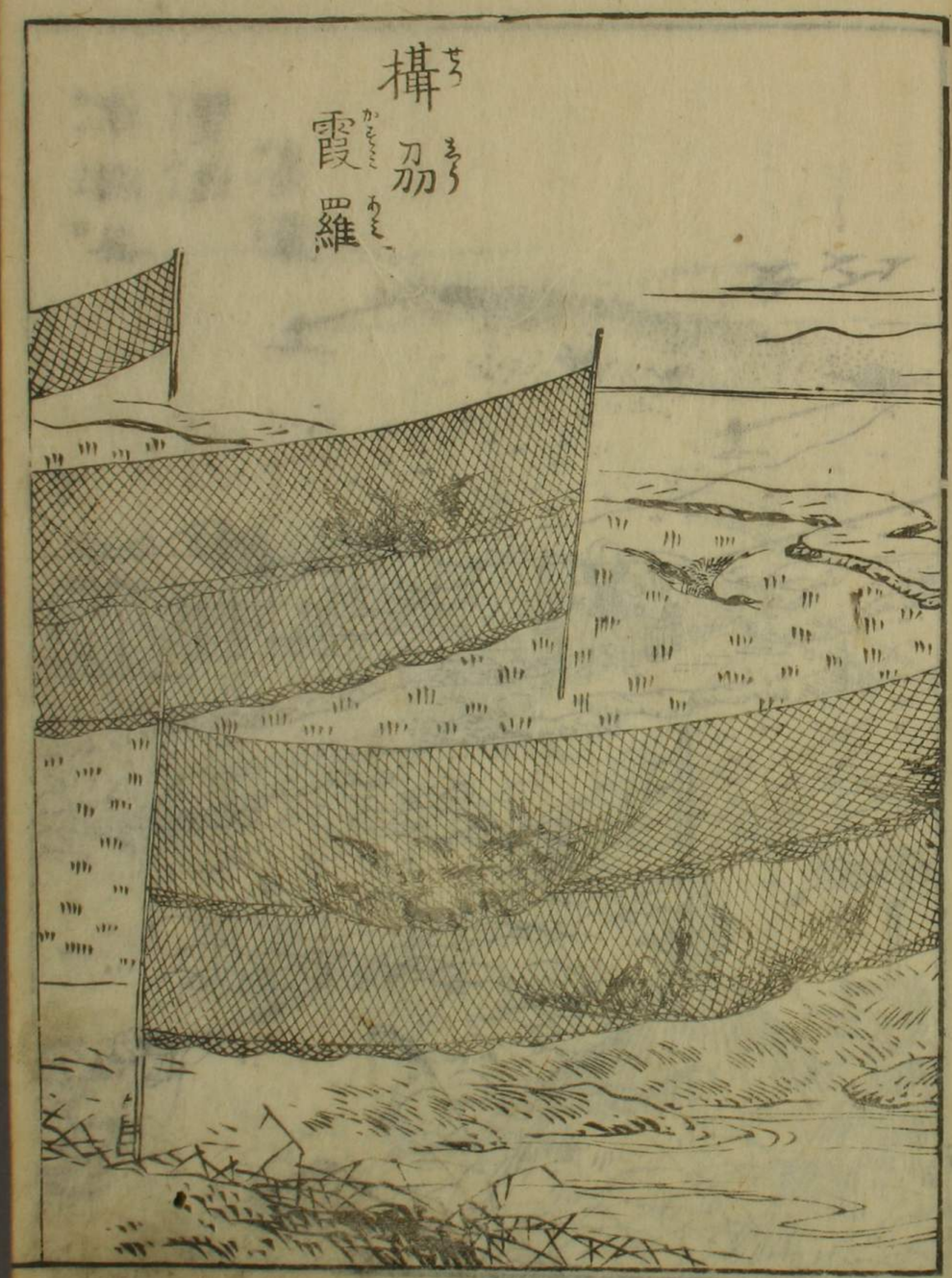
ひくゝそろ網を二人ゝうりよひ紀人せびろのうへより寝ひゝ一つも浅きとゝろく
一紫ゝ數十羽を獲るなり是を羽をおちゝひより抜ちて堤ゝより放より放と
ゝうゝゝびゝ是或羽ゝひゝろゝゝ鷹を取るも是或用ひられども砂ハ埋やう餌ハ
きゝゝうゝて未練の者ハ取獲がゝ
人家より苗ゝ中華緑頭を上品ゝ日本是或真鳥ゝ故より萬葉集
青さよりゝ又尾尖ゝ是より次く小ガモゝ古名タカヘゝ黒鴨
○赤頭○ヒトリ○ヨシフク○高フク　鵜鶏○ミハヲシ○秋沙○トウ長○ミコアイ○ハシ
ヒロ○冠鳥○尾長武分稈類多緑頭小鳥アヂハ味ゝ其余ゝからゞ

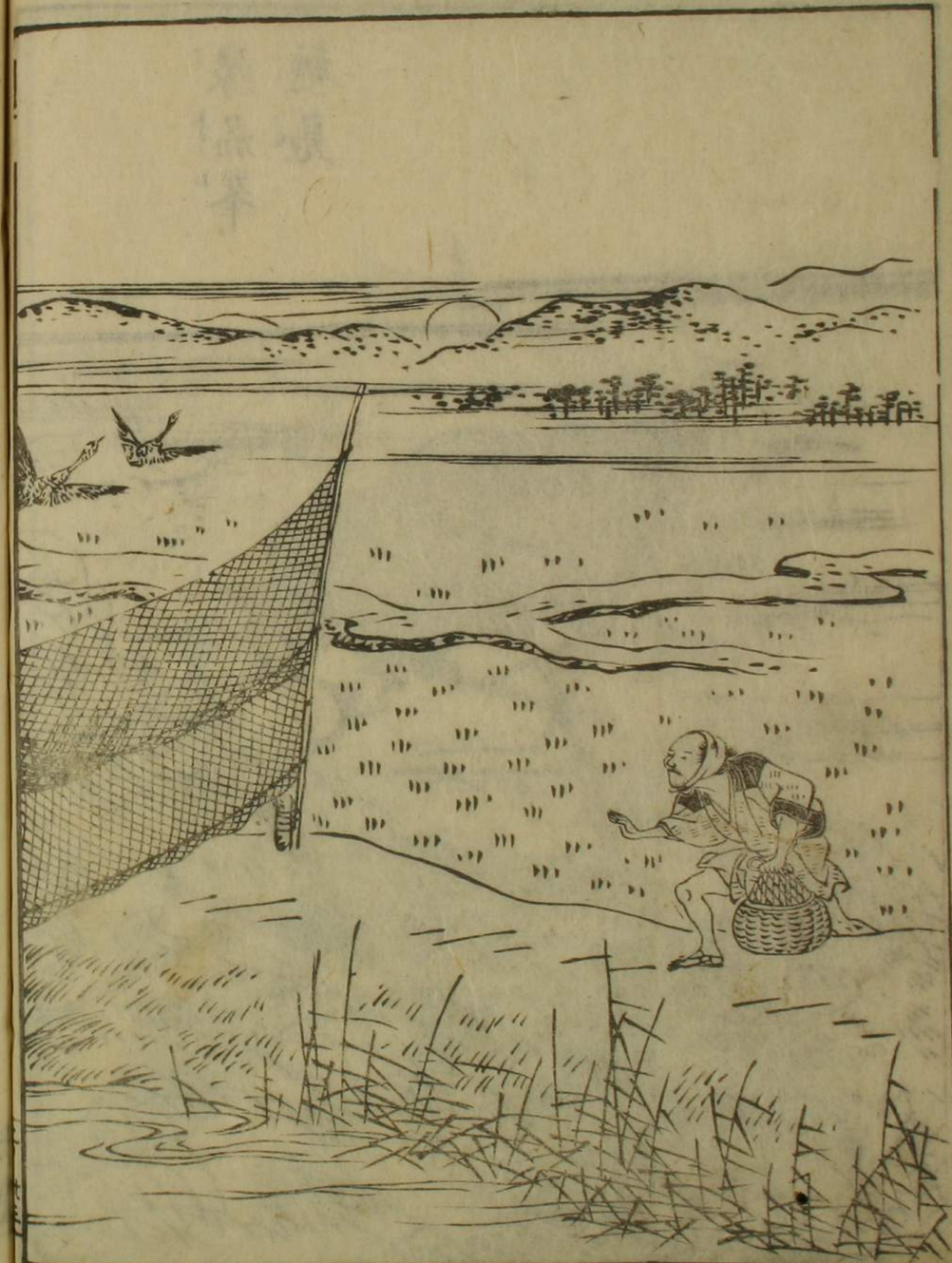
○峯越鴨　鴨の字ハアヒロゝ故ゝ一名水鴨ゝ
カモハ鴨を略ゝ今作ゝ

是豫加の山より捕る方術なり八九月の朝夕島の群きゝ峯或越ゝに
茅草も翅より摺ゝ切もゝ高く生る事なきより人其草の陰より間遥深さ
共より三ゝ人斗より穿ちたゝ穴より隠ゝ羅を扇の形より似ゝ其要の取より

豫劦峯
越息

構加霞羅





津國無
雙返
鳧羅

長き竹の柄を付く穴の上ちゝく飛まわるとふせ捕る是も羅の縮
鳥を纏はるゝと捕をる練れ者なるでも易獲がたし　俱〳〵峯ハ西方ハ田のいなかなり
細をるはけゝ阪細ゝ

○捕熊

熊の名所

熊を必大樹の洞中に住まゝ眠る物なれば丸木或藤かぢらして搭
るのごとく結ゝて洞口を閉塞ゝて木の枝を切ゝ其洞中へ多多
入れば熊其枝を引入ゝて洞中を塡塞ゝ洞口をふさぐ
て美濃國にては竹鑓因幡に鑓肥後には鉄鉋北國にてはなゝとゝ
所雖刀のごとき物にて或は切或は突こゝ何にても月の輪の如上にて急ぶ
と後又石見國の山中には背多く炭焼ゝ古穴の住多り是を捕の鑓焼
にて頻にうちて搭甚小さゝとて飽まで苦ゝ発憤怒せて却取
たり○又一法には落ゝて捕るなり是は豫加にて天井落と云

阿加にておとしとゝ（ラスハヲン　そそ敷）其様図にて細ゝ長さ二間余の竹筏にて
地下に鹿の肉を小に燻べて餌とし後又柏の實三ヤ〳〵キ實ゝ時し
上に大石二十荷ばかり置く又阿加にて七十五荷をもれなれば落
時乃青雷のごとく落く尚下うり機を動うゝと三日ばかり其止
時とゝ〳〵石を除き機をはづれば熊ゝ然ゝ立なゝら只八十中に一尺洋り
流入ゝ死ゝとゝ立ゝ○又一法に陷穴にもゝ機の制に似り
中にも飛弾加賀越の國には大身塗をはく追廻ゝて捕もう外る
ゝこのゝ〳〵ゝれば陷せゝ一歩をはゝられば熊ゝ不ゝて人よむ時
又月の輪とゝ人一歩に忍ゝ祥ゝ忍ちにやゝて突出ゝこれ
獵師の剛勇且手練早業にはゝざれば却ゝ危きことも多ゝ
○又一法に駿加府中に捕に熊の巣穴の左右に両人大なる斧を振拳
持ゝ待ちうけ外に一人の人ゝて樹の枝なゝとゝ巣穴の中
と突探ゝれば熊其樹を巣中へひきいれんとゝ引ゝ搭ゝ

陸奥捕熊

捕洞
中熊

以斧擊熊手

て仕せされど尚枝の宮〜こゝよりをかゝゆをうぐひてかの両
方ゝ斧をもてあまをあ為をとる熊をうよりかゝみ紀物ゝれど是ゝ勢
仕さて終ゝ獲ゝかくて膽を云ゝ皮を出をて奥加ゝ國津産ゝて
脚の肉を食ゝく貴人の膳ゝ是を加ゝ○熊常ゝ食ゝをゝれゝ
山犬　筍　ズカニ　凡木の實ハ其ゝ紙好ゝゝ獸肉も喰ゝぬゝけゝど
蝦夷ゝい人の乳ゝて養い置ゝもゝゝ

○　取膽

熊膽ハ加賀ゝ上品ゝ紙後紙中出羽ゝ出る物ゝれゝ亞ぐ其余四國周
幡肥後信濃美濃紀加其外所〜〜ゝも出を松前蝦夷ゝ出を物下
品多〜〜されど加賀必ゝ上品ゝもけゝど松前ゝゝ下品ゝもけゝら
ど其性其時節其屠者ゝ練立ゝも有ゝ一概ゝ論ゝ難し
加賀ゝ上品ゝとゝゝゝの三種　黒様　豆粉様　琥珀様是ゝ中ゝも
琥珀様ゝとも偽ゝゝ是ハ夏膽冬膽ゝとゝ取る時節ゝゝて名

を異ゝて夏の物ハ皮厚く膽汁少〜下品ゝ八月以後ゝ久膽ゝ
是皮薄く膽汁滿ゝ上品ゝ紙ゝ琥珀様ハ夏膽なれども久ゝ
膽ゝ勝る黄赤色ゝて透明ゝ黒様ハ色ゝ黒ゝ光ゝ八是世ゝ多

○　試眞偽法

和漢ともゝ偽物多ゝゝと見ゝ本草綱目ゝ試法を載ゝ膽坑
米粒許水面ゝ黙ゝゝ塵を避く運轉ゝ道ゝゝ底ゝ線のごゝゝ
引物ゝ眞ゝゝと云ゝ按ゝゝゝ是古質の法ゝて未ゝ盡ゝ似
ゝゝ凡ゝ獸の膽何乃物ゝゝも水面ゝ運轉ゝ熊膽ゝ限ゝゝ或ゝ
獸肉ゝ屠ゝ或ゝ貴熬ゝゝ家の煤ゝ是亦水面ゝ運轉ゝゝと
試ゝゝゝゝゝゝ素人業ゝ試ゝゝ仕方の外ゝ若ゝゝ不
得水ゝ黙〜〜て水底ゝ線ゝ引ゝ試ゝゝゝ運轉ゝゝゝ其
線至ゝ細ゝゝゝ乞疾執物ゝゝ運轉遲ゝ物又舒ゝゝ
ゝて止ゝ物ハ皆ゝ偽〜ゝゝゝ又運轉速ゝゝゝ盡ゝ消ゝ物

佳からざる不佳物はおのづから勢ひ碎け線進疾るらざる又粉のごとく物の落るも下品とそゝぐ〳〵又水底にて黄赤色なるを上品にて褐色なるは極多く偽物なり作業者は香味の有無を以て分別をなして眞物にして其上品なる物は古上品にして俄に農さ苦味をたらしを彼苦味は入て粘ぜざる苦味侵潤に増ては中分然として清潔なる苦味のみなる物は偽物なり苦味の物を良とせまゝ麝臭香味の物は良らざるといへども是は肉に養られ〳〵熊の性にして必偽物とも定先かゝて其中初味く後苦物は劣なり又焦気物は良品なり是試法教へく教へらるゝ必年来の練妙〳〵とも眞偽は難〳〵やすく〳〵て美悪は難〳〵かゝ〳〵

○制偽膽法

黄柏　山梔子　毛黄蓮の三味共極細末とし山梔子を水〳〵煎して其香殘除さ三味合せて水共和して煎〳〵詰むをゝ黒色光澤乾て眞物のごとく是共裏むに美濃紙二枚を合せ水仙花の根の汁をひたして乾しさ裏〳〵物を浸らしそゝ包て待て板に挟て陰乾にしを紙の皺又薬汁の潤入て實に膽皮のごとくなるを制製をれば暑中に至て爛潤やすく故に必夏日に制製を是は偽後邊に製して他國も大抵かくのごとく他方悉知ざるなり○又偽法にて柿とらへ物味苦〳〵是を古傘の紙にくむ〳〵とそゝ　或は眞に膽皮に偽物を納をて物もまくりて是に人を惑にの甚し

附記

熊は黒を物故よくてとらへ〳〵ども〳〵ごとくに定をごとく是全く朝鮮の方言なるべし熊川とコモガイとらへ帰て方の轉なるべし今も朝鮮乃信熊をコムとなる